

☆「代々(橙)続く行事と語呂合わせ」(岡根望未)

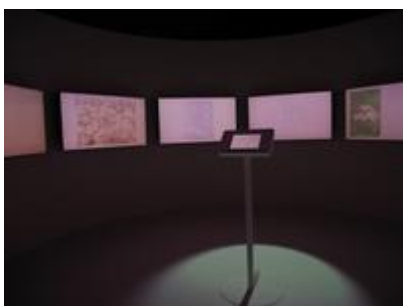
四季に恵まれている日本には、季節や月ごとに様々な行事があります。その中で私は特に、もうすぐ迎える一年の始まりのお正月に興味を持ちました。お正月とは年神様を迎えて昨年の実りと平穏に感謝し、新しい年の豊穰と平安を祈る行事です。代表的なお正月飾りの鏡餅は年神様への供え物であるとともに、穀物の実りをもたらす年神様の依りつくところとされています。鏡餅の飾り方は地方や家によって異なります。

丸い餅を「鏡」というのは、鏡には神の姿が留まるという信仰からきていて、餅を大小に二つ重ね合わせるのには、月(陰)と日(陽)をあらわしたもので「福と徳」が重なるようにとの願いが込められていると言われていています。餅の上に飾られる橙は「代々」栄えるという語呂合わせからめでたいものとされています。前の実は次の実がなるまで落ちないという意味で代々とかけられていることや橙はみかんより皮が硬くて腐りにくく飾るのに適しているということを知りました。

その他の飾りの意味も調べてみました。橙の上に飾る「扇」は末広がりなので子孫繁栄を意味し、餅の上に飾る昆布は「よろこぶ」という語呂合わせになっていたり、餅の下に飾る譲り葉も後の世代まで福を「譲る」という語呂合わせになっていたりするそうです。餅の下に飾る常緑の裏白は長寿を願っていたり、裏が白いことから清廉潔白を意味していたりすると言われていたそうです。

飾り物とそれに込める願いを語呂合わせで考えた昔の人々は洒落ていると思いました。語呂合わせができる豊富な日本語を十代である私たちが崩すことなく次世代に伝え、守っていくべきだと考えました。

☆「日本の色を体で感じる」(カフレ スレヤ)



私はパナソニックセンター東京で行われた特別企画展の「文化のちから」の取材体験をしてみて、普段の生活ではできない発見や日本の文化の深さを改めて体で感じる事ができた。

展示を見る前に、入り口のところで和風な音と周りの色で一瞬で別世界に入り込めたような気がした。そして展示を見始めて、日本人の昔からの感性と表現力の豊か

さを「色」から感じた。

文化のちからの「日本の色」展示では、最新技術を使用して、空間を映像で伝統色に染め、色を体で感じる事ができた。16色の中から音声認識技術で自分で一色選ぶことが出来て、展示の空間は一瞬でその色に染まりとてもわかりやすかった。私は「なでしこ色(撫子色)」がとても明るく、一番「春」を感じる事ができた。



さらに「装う」のコーナーでは四季や行事、場面に応じた生地や色など、和装の基本的なルールを白い着物にプロジェクションマッピングで写してわかりやすい展示だった。このコーナーでも伝統色の使ったとても美しかったと、今考えると思う。

今回の「文化のちから」は紋や室礼、その他歌舞伎などを最新技術を使い、子供達やお年寄りなど、どの世代にもわかりやすい展示で楽しむ事ができたと思います。2020年のオリンピックも近く、私たち若い世代は、日本の文化をいろいろな人たちに伝える役目を持っていると思います。その役目をしっかり果たせるよう、これからも積極的にこういうイベントに参加したいと思います。

☆「新たな発見と楽しみ」(池澤綾祐実)

10月18日から12月4日まで、パナソニックセンター東京で開催されている特別企画展「文化のちから」日本の伝統文化・芸術と最新のデジタル技術が融合した体験が、今まで私達が知り得なかった新たな発見と楽しみを感じる事だろう。

「文化のちから」では和服や浮世絵などの趣向を凝らした様々な展示が行われている。その中から紹介するのは「日本の紋」の展示だ。紋、紋様とはユニークな形や色彩が特徴である日本伝統のデザインであり、それぞれ様々な意味と願いが込められているそう。ここでは2つの紋、紋様を紹介する。

「七宝(しちほう)」という同じ大きさの円を四分の一ずつ重ねた紋様は円形が円満・調和という意味が込められている。もう一つ「麻の葉(あさのは)」という六角形を規則的に配置した紋様には麻が丈夫でまっすぐ伸びる植物であることから、子供の健やかな成長の願いが込められているそう。どちらも名前からは想像できない意味や願いが込められている。ここで紹介した以外にもたくさんの紋、紋様を見ることができる。そしてデジタル技術を使った工夫された展示も面白い。

「文化のちから」是非一度来てみたいかがでしょうか。

☆「最新技術と日本文化」(奥山美沙)

私は「国際展示場駅」から徒歩2分の所にあるパナソニックセンター東京に行った。そこでは文化プログラム「文化のちから特別企画展」が行われていた。

「文化のちから」のテーマになっていたのは衣食住だ。オリンピック・パラリンピックに向けてパナソニックが日本の最新技術をつかい、日本の文化を多くの人に伝えていくという企画だ。プログラムの中には様々なコーナーがありたくさんの人が楽しめる内容となっている。

私はその中でも一際目立つ「日本の色」のコーナーに足を運んだ。そこには筒状の空間に9枚の大きなパネルがぐるりと並べありパネルには様々な色の名前が映し出されていた。使い方は簡単だ。コーナーの中心においてあるタブレット端末のに向かって色の名前を言うとその色が9枚のパネルに映し出されるというものだ。パネルに映し出される色は部屋中に反射してとても鮮やかで美しいものだった。

日本人は古来より400以上の色を使い分けてきた。それを他国や若い世代に伝えていくことは決して簡単なことではない。だが最新技術を使用することで日本伝統的な衣食住の良さを今まで以上に分かりやすく伝え、他国の方々にも私達にも日本の伝統を身近に感じることができるだろう。

2020年にオリンピック・パラリンピックを控えた日本は、この国の文化である衣食住の特色を現代の人に再確認させるのはもちろんのこと、他の国々にもこの良さを広げていくことが大切なのではと私は思う。

☆「松下幸之助と月の行事について」(笹原悠吾)

松下幸之助とは？

簡単に言うと...茶道の中のとてもすごい人！！

▽松下幸之助について

松下幸之助は、茶道の精神は「素直な心」に通じており、茶道を広めることは「素直な心」の普及につながると教えていた。

日本の伝統的な茶道の心「人に対する気遣い」が、「おもてなしの心」が日本人にとって大切な文化であると想いをおもっていた。

茶道具においても伝統のものづくりにかける工芸作家の作品を実際のお点前に使い、伝統工芸の進行にも努めていた。

▽月の行動について(みなさんに伝えたいと思った月)

1月 お正月

お正月とは、年神様を迎えて昨年の実りと平穩に感謝し、新しい年の豊穡と平安を祈る行事。

二段に重ねた鏡餅は「福と徳」が“重なる、ようにとの願いがこめられていると言わ

れている。

また、“橙”はその読みから“代々”家が続く縁起物としておめでたい物とされた。

5月 端午の節句

田の神を迎える行事として広まり、やがて武者人形などをかざる男子の節句に変化する。行事に欠かせない“菖蒲”を“尚武”とする武家の考え方が影響をあたえたと考えられている。

立身出世を意味する鎧兜や鯉のぼり、武士の魂を表すといわれるちまき、縁起の良い柏がかざられます。

☆「日本の文化について」(山田恵生)

400色以上を使い分ける日本人の感性—日本の豊かな自然とそこで暮らす人々の感性は、400を超える和色のバリエーションを生み出した。その中の一つであるのが、『青海波』である。



この青海波は、同心円が扇状に重なれ末広がりに連なる縁起の良い紋。そして、この青海波は、水の意味を持っているが、その意味をもったのは、鎌倉時代に作られた古瀬戸瓶子が始めた。

これは、平面の模様だが、『七宝』というのは、同じ大きさの円を、4分の1ずつ重ね描かれる連続紋様。その円形は円満・調和を表し、中心に花模様を入れた花七宝や、円が重なった部分に小さな円を配置した星七宝などが作られている。僕は、この文化プログラムに参加して思ったことは、日本人の芸術差に関心を抱いたのもっと昔の文化を知りたい。